

## 報 告

# 母親の更年期症状が思春期から青年期にある子どものアイデンティティ形成と心身の健康に与える影響

山本 三奈<sup>1)</sup>, 塩飽 仁<sup>2)</sup>, 藤田 愛<sup>3)</sup>  
遠藤由美子<sup>4)</sup>, 才門 尚美<sup>5)</sup>

## 〔論文要旨〕

本研究は中学生から大学生の子どもと母親1,532組を対象に、母親の更年期症状が子どものアイデンティティ形成と心身の健康に与える影響について明らかにすることを目的とした。その結果、母親の更年期症状は中学生女子と大学生男子のアイデンティティに影響を与えていた。中学生女子は母親の更年期症状が強いほど子どものアイデンティティの確立を妨げる要因となっていた。大学生男子は、母親の更年期症状が強いほど子どもの情緒の安定を弱める要因となっていた。また、情緒の安定がアイデンティティの確立に影響を与えていた。母親の心身の状態が子どもに影響を与える可能性をふまえて母子それぞれとかがわっていくことが求められる。

**Key words** : 母親, 更年期症状, 思春期, 青年期, アイデンティティ, 心身の健康

## I. 緒 言

思春期の健康は、「健やか親子21」<sup>1)</sup>の主要課題の1つに取り上げられており、思春期にある子ども達への支援が求められている。また、思春期から青年期にある子どもの母親は同じ時期に更年期を迎える場合が多く、母子ともに役割や心身の健康状態の変化を通して、新しい自己のアイデンティティを統合する時期にある<sup>2)</sup>。このような母親の心身の状態は、心身ともに不安定な時期にある思春期から青年期の子どものアイデンティティ形成に影響を与えることが予想される。しかし、母親の更年期症状が子どものアイデンティティにどのような影響を与えるかについては、これまで明らかにされていない。

そこで、本研究は更年期にある母親の更年期

症状が子どものアイデンティティ形成と心身の健康に与える影響を明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

## 1. 対象と方法

対象は東北地方にある教育機関のうち、研究の主旨と方法を説明し、了承の得られた中学校1校の1年生の生徒と母親200組、高等学校1校の2年生の生徒と母親330組、高等専門学校1校の1年生から5年生の学生と母親770組、大学1校で看護学を専攻する1年生から4年生の学生と母親232組の総計1,532組とした。

調査は留め置き法にて行った。調査期間は平成15年10月下旬から12月上旬であった。

倫理的配慮として、調査協力依頼文に無記名

The Influence of Maternal Menopausal Symptoms on the Identity Formation and the Subjective Health of Adolescence

[1770]

Mina YAMAMOTO, Hitoshi SHIWAKU, Megumi FUJITA, Yumiko ENDOH, Naomi SAIMON

受付 05.12.12

採用 06.4.6

1) 山形大学医学部看護学科 (看護師/研究職) 2) 東北大学医学部保健看護学科 (看護師/研究職)

3) 東北福祉大学健康科学部保健看護学科 (助産師/研究職)

4) 山形大学医学部看護学科 (助産師/研究職) 5) 社会福祉法人 函館厚生院 函館中央病院 (助産師)

別刷請求先: 山本三奈 山形大学医学部看護学科 〒990-9585 山形県山形市飯田西2-2-2

Tel/Fax: 023-628-5453

で行うこと、データは研究以外に使用しないこと、協力を拒否しても不利益はないことを記載し、同意した場合のみ回答するよう求めた。記入後は各々封筒に入れて封をし、母子を組にして封筒に入れてもらい、母子間で情報が漏洩しないようにした。

## 2. 調査項目

### 1) 対象者の背景

属性として、子どもには性別、学年、年齢を、母親には年齢を調査した。

### 2) 子どもに対する調査の内容

#### (1) アイデンティティ尺度

この尺度は、日本の大学生の「モラトリアム心理」とアイデンティティの確立度との関連を検討するために開発された<sup>3)</sup>。「アイデンティティの基礎」10項目と「アイデンティティの確立」10項目からなり、4件法で回答を求める。「アイデンティティの基礎」は、対人場面における不安や孤独感など情緒的安定性に関する内容で、得点が高いほど情緒が安定していることを示す。「アイデンティティの確立」は主体性、個性、社会性といった青年期後期の発達課題にかかわる内容で、得点が高いほどアイデンティティが確立していることを示す。尺度開発時のCronbachの信頼性係数は「アイデンティティの基礎」 $\alpha = 0.80$ 、「アイデンティティの確立」 $\alpha = 0.82$ であり、高い信頼性が確認された。本研究において信頼性係数を算出した結果、「アイデンティティの基礎」 $\alpha = 0.79$ 、「アイデンティティの確立」 $\alpha = 0.84$ であり、それぞれ内的整合性が保たれていた。

#### (2) ジェンダー・アイデンティティ尺度

土肥<sup>4)</sup>が作成した尺度であり、「性の受容」、「父母との同一化」、「異性との親密性」の3つの下位尺度からなる。男性用・女性用それぞれ計30項目であり、回答は4件法で求め、各得点が高いほど当該の傾向が強いことを示す。また、下位尺度の総得点が高いほどジェンダー・アイデンティティが発達していることを示す。尺度開発時の信頼性係数は「性の受容」男性用 $\alpha = 0.71$ 、女性用 $\alpha = 0.73$ 、「父母との同一化」男性用 $\alpha = 0.65$ 、女性用 $\alpha = 0.71$ 、「異性との親密性」男性用 $\alpha = 0.82$ 、女性用 $\alpha = 0.78$ であり、

信頼性が確認されている。

本研究ではパス解析をするにあたり、下位尺度の総得点をジェンダー・アイデンティティとして投入した。本研究での信頼性係数は男子 $\alpha = 0.73$ 、女子 $\alpha = 0.82$ であり、内的整合性は確保されていた。

### (3) 自覚する心身の健康

身体健康状態と心の健康状態について、それぞれ1問ずつを調査した。回答は得点が高いほど健康であると自覚していることを示すように4件法で求めた。

### 3) 母親に対する調査の内容

#### (1) 簡略更年期指数 (simplified menopausal index ; SMI)

日本人の更年期症状を効率的に把握するために作成された指数<sup>5)6)</sup>であり、10項目からなる。0点から25点は「異常なし」、26点から50点は「食事、運動に注意」、51点から65点は「更年期・閉経外来を受診」、66点から80点は「長期間の計画的な治療」、81点から100点は「各科の精密検査、長期の計画的な対応」と評価される。本尺度は開発時に標準化されていないが、国内の臨床や研究で最も使用頻度が高いもので実績があり、臨床的には極めて有用性が高く、評価、信頼されている尺度である。本研究における信頼性係数は $\alpha = 0.81$ であった。

## 3. 分析方法

統計解析にはSPSS 12.0J for Windowsを使用した。各尺度について正規性を検定したところ、いずれも正規性の仮定が棄却されたため、独立した2群間の得点差の検定にはMann-WhitneyのU検定、独立した3群以上の得点差の検定にはKruskal-Wallisの検定を用い、その後の多重比較はBonferroniの不等式による修正を適用した。相関についてはSpearmanの順位相関係数を使用した。また、各要因の因果関係を明らかにするためにモデルを作成し、AMOS 5.0を使用してパス解析を行った。モデルの全体評価にはカイ二乗検定、有意確率、Comparative of Fit Index (CFI)、Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA)を採用した<sup>7)</sup>。パス係数( $\beta$ )は絶対値が0.15以上で有意確率が0.05未満のものを採用した。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 対象者の属性

回収率は中学生81.0%, 高校生58.5%, 高等専門学校生32.6%, 大学生54.3%であった。そのうち中学生158組(有効回答率97.5%), 高校生176組(有効回答率91.2%), 高等専門学校生246組(有効回答率98.0%), 大学生126組(有効回答率100.0%)の計706組を分析対象とした。高等専門学校生は年齢により高校生と大学生として分類した。検定の結果, 男女比, 学校別人数比には差がみられなかった(表1)。

母親の平均年齢は45.4±4.8歳(平均±SD)であった。

#### 2. アイデンティティ

##### 1) 性別での比較

アイデンティティの確立では女子の方が男子よりも自己への信頼が形成されていた( $P=0.040$ )が, アイデンティティの基礎には差がみられなかった(表2)。

##### 2) 学校別での比較

アイデンティティの基礎は中学生が高校生( $P=0.000$ )および大学生より有意に高く( $P=0.000$ ), 情緒が安定していた。

アイデンティティの確立は中学生より高校生( $P=0.000$ ), 中学生より大学生が有意に高かった( $P=0.000$ )(表2)。

#### 3. ジェンダー・アイデンティティ

男女いずれにおいても, ジェンダー・アイデンティティは中学生より大学生(男女とも: $P=0.000$ ), 高校生より大学生(男: $P=0.005$ , 女: $P=0.000$ )が高かった(表2)。

#### 4. 子どもが自覚する心身の健康

##### 1) 性別での比較

心の健康については男子の方が女子よりも健康であると自覚していた( $P=0.000$ )が, 身体への健康には差がみられなかった(表2)。

##### 2) 学校別での比較

心の健康は中学生と高校生( $P=0.000$ ), 中学生と大学生で有意差がみられ( $P=0.000$ ), 中学生は高校生および大学生よりも心の状態を

表1 学校別における男女の内訳

| 性別 | 学 校            |                |                |               | 合 計            |
|----|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|
|    | 中学生            | 高校生            | 大学生            | 不 明           |                |
| 男子 | 60<br>(38.0)   | 103<br>(33.3)  | 93<br>(43.3)   | 0<br>(0.0)    | 256<br>(36.3)  |
| 女子 | 90<br>(57.0)   | 206<br>(66.7)  | 122<br>(56.7)  | 0<br>(0.0)    | 418<br>(59.2)  |
| 不明 | 8<br>(5.0)     | 0<br>(0.0)     | 0<br>(0.0)     | 24<br>(100.0) | 32<br>(4.5)    |
| 合計 | 158<br>(100.0) | 309<br>(100.0) | 215<br>(100.0) | 24<br>(100.0) | 706<br>(100.0) |

数値:人数(%),各学校における男子と女子の比率の差の検定(カイ二乗検定):NS

健康であると自覚していた。一方, 身体への健康には差がみられなかった(表2)。

#### 5. 母親のSMI

SMIの平均値は21.1±17.6点(最小0点~最大100点)であり, 対象は更年期症状の軽い集団と判定された。

#### 6. 母親の更年期症状と子どものアイデンティティ, ジェンダー・アイデンティティ, 心身の健康の因果関係

パス解析によって検証したところ, 図1から図6までのパス図が最も妥当であった。

##### 1) 中学生男子(図1)

アイデンティティの基礎が高い, つまり情緒が安定しているほどアイデンティティの確立とジェンダー・アイデンティティに良い影響を与え, また同時にアイデンティティの確立がジェンダー・アイデンティティを高めていた。心が健康であると自覚するほどアイデンティティは確立されていた。しかし, 母親の更年期症状との因果関係はみられなかった。

##### 2) 中学生女子(図2)

アイデンティティの基礎の高さがアイデンティティの確立に影響し, さらにジェンダー・アイデンティティの確立, 身体への健康を良好と自覚することにつながっていた。一方, 母親の更年期症状が強いことが子どものアイデンティティの確立を妨げる要因となっていた。

##### 3) 高校生男子(図3)

情緒が安定しているほどアイデンティティは

表2 アイデンティティ, ジェンダー・アイデンティティ, 自覚する心身の健康の学校別, 性別による比較

|                      |     | n   | 最小~最大  | 中央値  | 平均値±SD    |
|----------------------|-----|-----|--------|------|-----------|
| アイデンティティの基礎          | 中学生 | 136 | 15~ 40 | 28.0 | 28.2±5.4  |
|                      | 高校生 | 287 | 10~ 40 | 24.0 | 24.2±5.5  |
|                      | 大学生 | 210 | 14~ 38 | 25.0 | 25.4±4.8  |
|                      | 男子  | 245 | 10~ 40 | 26.0 | 25.6±5.9  |
|                      | 女子  | 386 | 10~ 40 | 25.0 | 25.3±5.2  |
| アイデンティティの確立          | 中学生 | 142 | 10~ 39 | 25.0 | 25.0±4.8  |
|                      | 高校生 | 289 | 12~ 40 | 27.0 | 27.2±5.3  |
|                      | 大学生 | 213 | 13~ 40 | 29.0 | 28.3±5.1  |
|                      | 男子  | 252 | 10~ 40 | 27.0 | 26.5±5.6  |
|                      | 女子  | 390 | 10~ 40 | 27.0 | 27.5±4.9  |
| ジェンダー・アイデンティティ<br>男子 | 中学生 | 52  | 66~ 96 | 84.0 | 83.1±8.4  |
|                      | 高校生 | 94  | 65~115 | 85.0 | 86.3±9.0  |
|                      | 大学生 | 87  | 70~110 | 90.0 | 90.0±8.9  |
| ジェンダー・アイデンティティ<br>女子 | 中学生 | 83  | 61~102 | 80.0 | 81.4±9.4  |
|                      | 高校生 | 184 | 52~111 | 84.0 | 83.5±10.1 |
|                      | 大学生 | 119 | 58~112 | 92.0 | 91.0±10.8 |
| 心の健康                 | 中学生 | 143 | 1~ 4   | 3.0  | 3.1±0.9   |
|                      | 高校生 | 295 | 1~ 4   | 3.0  | 2.5±1.0   |
|                      | 大学生 | 213 | 1~ 4   | 3.0  | 2.7±1.0   |
|                      | 男子  | 253 | 1~ 4   | 3.0  | 2.9±1.0   |
|                      | 女子  | 396 | 1~ 4   | 3.0  | 2.6±1.0   |
| 身体の健康                | 中学生 | 148 | 2~ 4   | 3.0  | 3.3±0.6   |
|                      | 高校生 | 303 | 1~ 4   | 3.0  | 3.3±0.7   |
|                      | 大学生 | 212 | 1~ 4   | 3.0  | 3.2±0.7   |
|                      | 男子  | 251 | 1~ 4   | 3.0  | 3.3±0.7   |
|                      | 女子  | 412 | 1~ 4   | 3.0  | 3.3±0.6   |

2 群間の比較: Mann-Whitney の U 検定, 3 群間の比較: Bonferroni の不等式による修正, \* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$

確立し, さらにジェンダー・アイデンティティの確立につながっていた。同時にジェンダー・アイデンティティを確立することは, 情緒の安定にも影響を与えていた。また, 身体の健康と心の健康は相関しており, 心が健康であると自覚しているほどアイデンティティは確立されていた。しかし, 母親の更年期症状との因果関係は認められなかった。

#### 4) 高校生女子 (図4)

情緒が安定しているほどアイデンティティは確立し, アイデンティティの確立はジェンダー・アイデンティティの確立と身体の健康を良好であると自覚することに影響を与えていた。高校生男子と違い, 情緒が安定しているほ

ど身体を不健康であると捉えていた。一方, 母親との因果関係は認められなかった。

#### 5) 大学生男子 (図5)

母親の更年期症状と因果関係がみられた。中学生女子とほぼ同様の因果関係を示していたが, 母親の更年期症状はアイデンティティの確立ではなく, 基礎に影響を与えており, 更年期症状が強いことが子どもの情緒の安定を弱める要因となっていた。

#### 6) 大学生女子 (図6)

母親の更年期症状からは影響を受けておらず, 情緒が安定しているほどアイデンティティは確立し, それがジェンダー・アイデンティティの確立にもつながっていた。また, ジェン

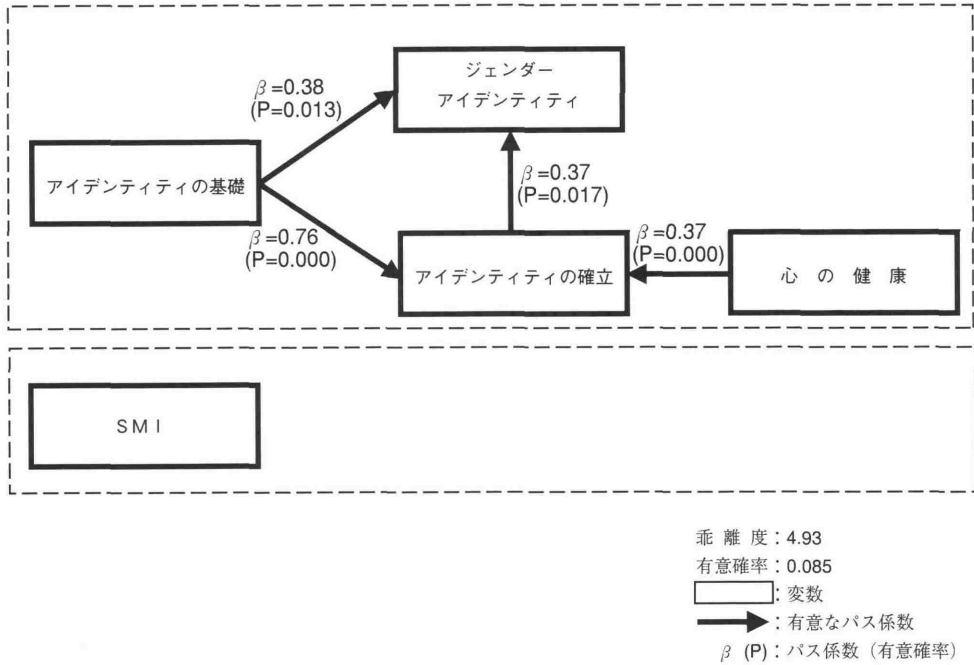


図1 中学生男子における心身の健康，アイデンティティ，ジェンダー・アイデンティティ，母親のSMIの因果関係

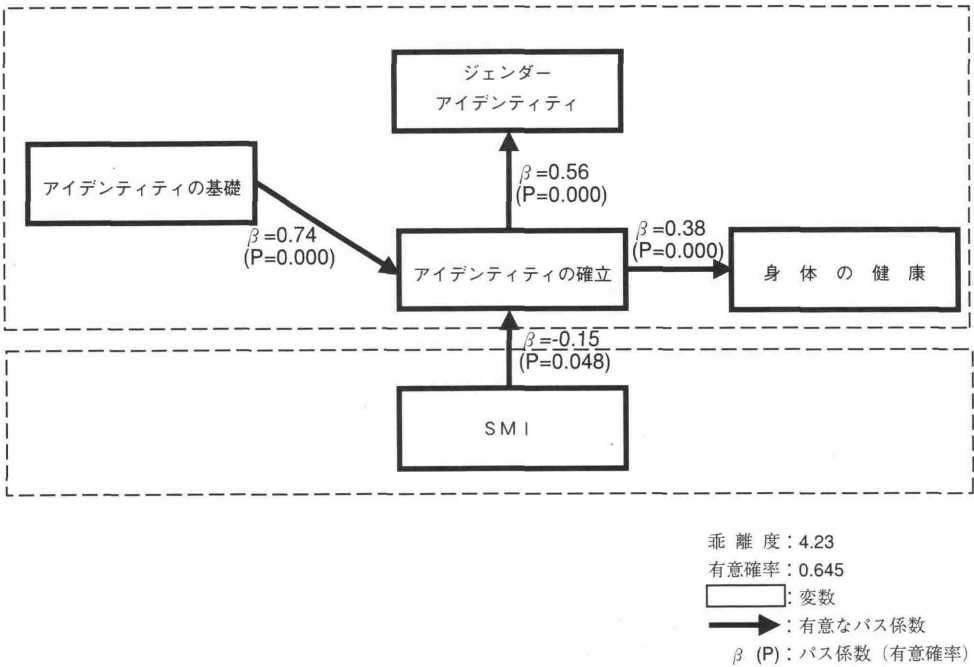


図2 中学生女子における心身の健康，アイデンティティ，ジェンダー・アイデンティティ，母親のSMIの因果関係

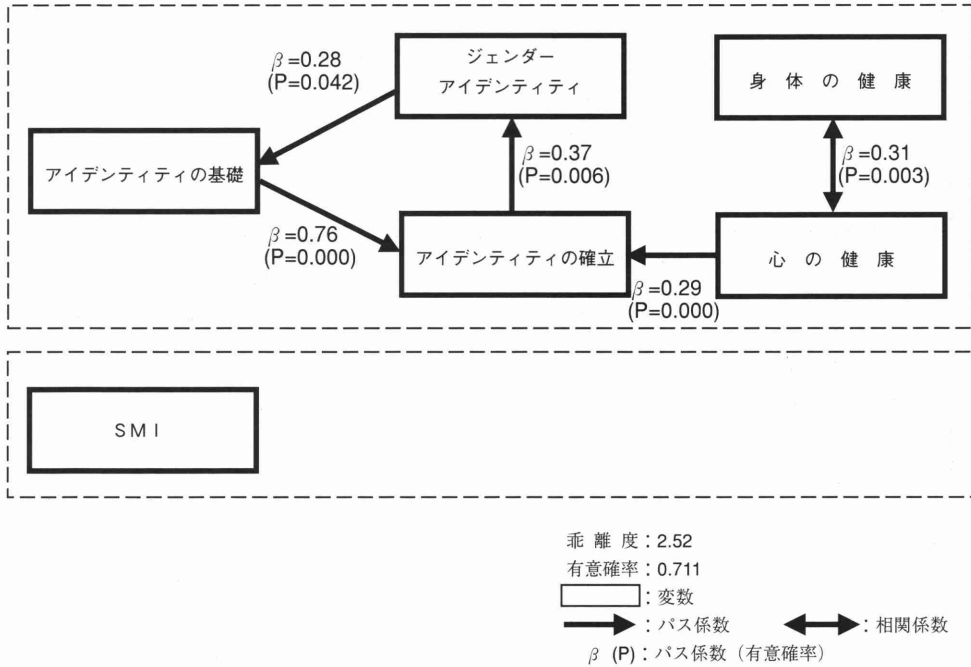


図3 高校生男子における心身の健康, アイデンティティ, ジェンダー・アイデンティティ, 母親のSMIの因果関係

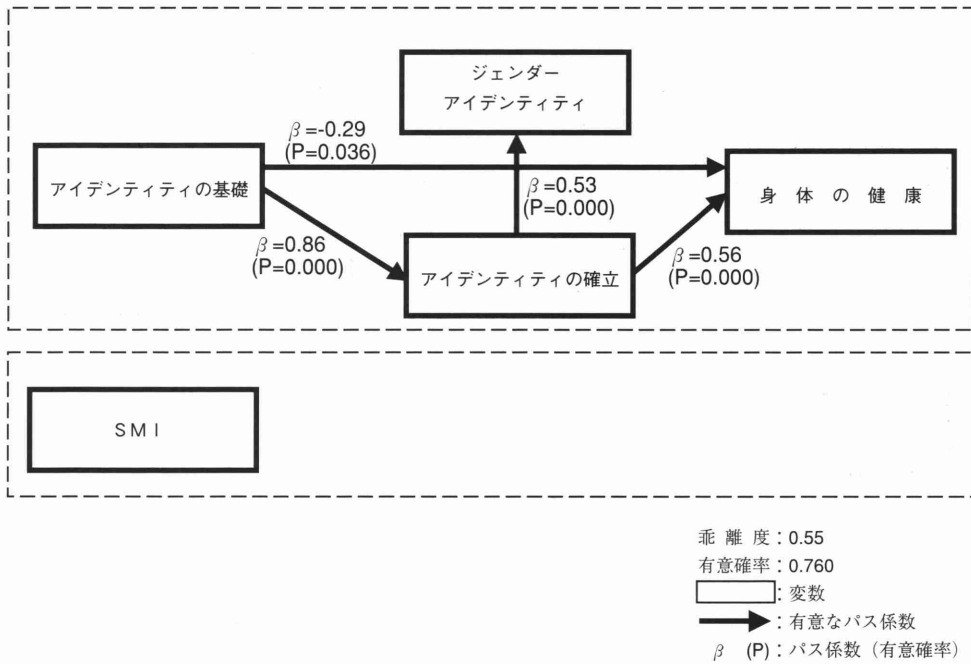


図4 高校生女子における心身の健康, アイデンティティ, ジェンダー・アイデンティティ, 母親のSMIの因果関係

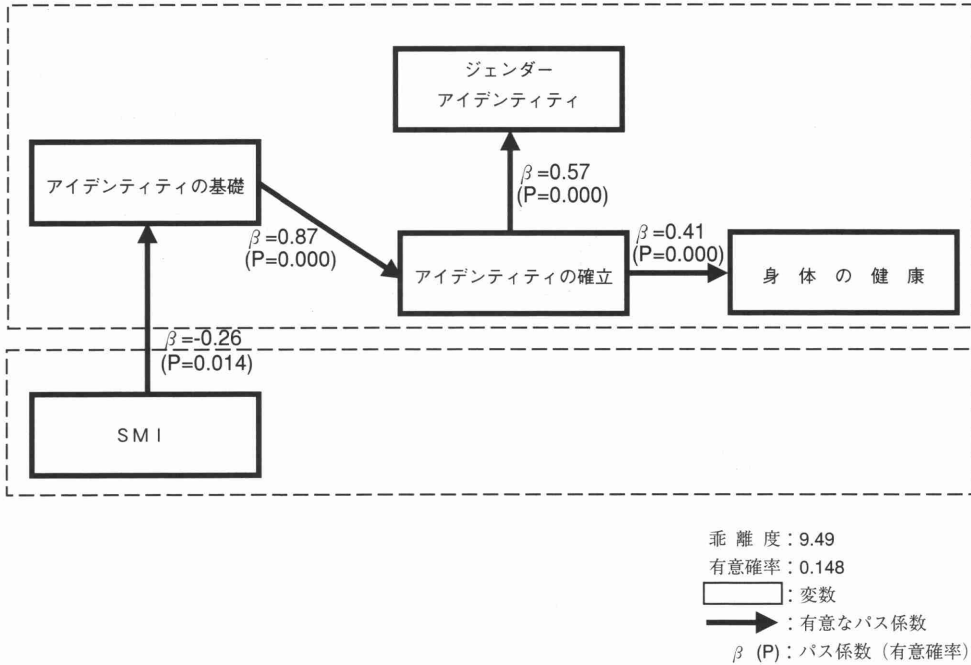


図5 大学生男子における心身の健康, アイデンティティ, ジェンダー・アイデンティティ, 母親のSMIの因果関係

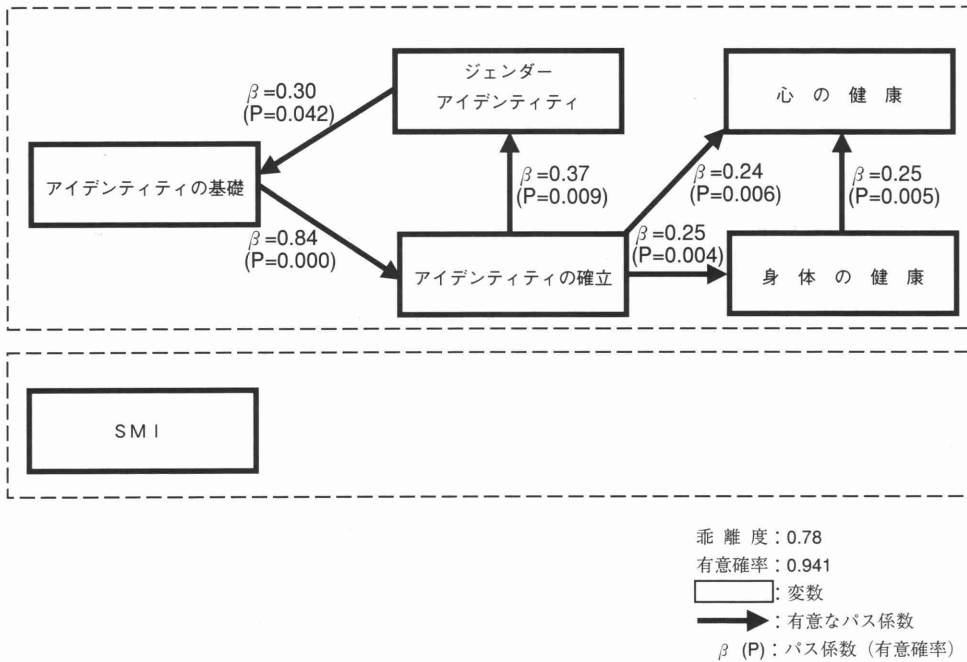


図6 大学生女子における心身の健康, アイデンティティ, ジェンダー・アイデンティティ, 母親のSMIの因果関係

ダー・アイデンティティを確立することは、逆に情緒の安定にも影響を与えていた。アイデンティティを確立することは心身の健康を良好に自覚することにつながっていた。

#### Ⅳ. 考 察

##### 1. アイデンティティ

子どものアイデンティティ発達については、青年期の終わりにアイデンティティの基礎が安定したものとなるとともに、より高いアイデンティティの確立が進むと考えられている<sup>3)</sup>。本研究において、どの学校においても自己の情緒的安定がアイデンティティを確立していくことに強く影響を与えていることが明らかになり、先行研究<sup>3)</sup>と同様の結果が確認された。

学校別に見てみるとアイデンティティの確立は大学生が最も高く、およそ年齢順に得点が推移していたが、アイデンティティの基礎、つまり情緒の安定は中学生が最も高く、年齢順に推移しているとはいえなかった。高校生の時期から情緒的に不安定になる理由として、思春期の子どもたちを取り巻く日本の受験体制が影響していることが考えられる。日本社会における思春期は、進路決定に関する生徒の主体的で自由な課外活動はほとんど評価されず、むしろ成績に基づく進学先の決定が行われる厳しい進学受験体制をその特色としている<sup>8)~10)</sup>。

わが国では大学入学後、つまり青年期後期において初めて自由な役割実験の開始が許され、アイデンティティの基礎の形成、さらにはアイデンティティの確立に結びつく場合もある<sup>3)</sup>。高校生から大学生は進路決定や受験等によってアイデンティティを確立していく基礎を築く時期であり、心理的に不安や孤独感を強く感じるという脆弱性も持ち合わせていることが示唆される。

性別での比較では、アイデンティティの確立は女子の方がすすんでいた。この結果は、第二次性徴が男子より早く訪れることにより、自身の体や自分の存在について深く考え始める時期が必然的に早くなることが影響していると考えられる。また、友人関係において女子は男子に比べ自己開示や親密性を重視した交流、共有が中心<sup>11)</sup>であり、女子は他者との親密な関係のな

かでアイデンティティを高め、確立していくことが推察される。

そのため、身近な重要他者との関係性はアイデンティティの確立に影響を与えるとともに、アイデンティティの確立がうまくいかない場合は他者との良好な関係も持ちにくくなることも予測される。特に女子は男子より早期に重要他者との関係性から影響を受け始めることを認識する必要がある。

##### 2. ジェンダー・アイデンティティ

本研究でジェンダー・アイデンティティは大学生が最も発達しており、またパス解析において、すべての学年でジェンダー・アイデンティティがアイデンティティの確立から影響を受けていた。

第二次性徴の発現に伴い、思春期では身体的側面における性同一性の危機を経験するが、青年期に入ると自我同一性の確立が中心課題となり、進路および職業の選択、価値観の形成、さらに異性との関係が解決すべき課題となるといわれている<sup>4)</sup>。このような一連の発達過程が本研究でも示されたといえる。

アイデンティティの確立に向けて模索する青年期は、ジェンダー・アイデンティティの獲得にとっても重要な時期である。さらに、アイデンティティの基礎からも影響を受けていたことから、自己を信頼できる感覚を十分に持てないとジェンダー・アイデンティティの獲得も困難になることが示唆される。

##### 3. 心身の健康とアイデンティティ形成との関係

母親の更年期症状は子どもの心身の健康に直接的な影響を与えておらず、子どもの心身の健康はアイデンティティと関係がみられた。

子どもの心身の健康とアイデンティティの関係は性別で特徴がみられ、男子は心の状態を健康であると感じていることがアイデンティティの確立に影響を与えていた。大学生男子のみをみると、アイデンティティが確立していることが身体を健康であると自覚することに影響を与えていた。

一方、女子は一貫してアイデンティティの確立が身体の健康に影響を与えるという特徴がみ



られた。高校生女子では、情緒が安定しているほど身体を不健康であると捉えているが、この理由は今回明らかにできない。しかし、高校生女子においても、情緒の安定からアイデンティティの確立へとすすむことにより、身体を健康であると捉えるようになるという関係が強くみられた。

よって、これらの男女の特徴を総合して考えると、アイデンティティを確立することは自己の身体を健康な状態であると認識する一要因になっていることが考えられる。

#### 4. 母親の更年期症状が子どものアイデンティティ形成に与える影響

中学生女子と大学生男子において、母親の更年期症状が子どものアイデンティティに影響を与えていた。この理由として、女子は第二次性徴が早く訪れ、アイデンティティやジェンダー・アイデンティティの課題に対し男子よりも早く積極的に関与し、同性モデルである母親の心身の状態を敏感に感じ取り影響を受けるが、高校から大学の時期には重要他者である友人との関係や自分自身と向き合うことそのものがアイデンティティに影響を与えていることが考えられる。

一方、男子において異性としての母親が視野に入ってくるのは、先延ばしにしたアイデンティティの確立と対峙する大学生の時期であり、この時期に母親の心身の状態がアイデンティティの基礎である情緒の安定に影響を与えることが考えられる。

アイデンティティ課題に積極的に関与し始める段階は情緒が不安定なため、周囲の環境から影響を受けやすい、つまり感受性が高いのではないかと考えられ、母親の心身の状態が子どもに影響を与える可能性をふまえて母子それぞれとかわっていくことが求められる。また、子どもがアイデンティティの課題に関連して心身の状態が不安定になっている場合は、更年期症状を含めた母親の査定を行っていく必要性が示唆される。

本研究は対象を東北地方にある中学校から大学各々1校としたため、調査施設の特徴が反映されるという偏りが考えられ、思春期から青年

期にある子どもとその母親全般の特徴を示したとはいえない可能性がある。今後、調査地域を拡大するとともに、対象者数を更に増やして検討していくことが課題である。

#### 謝 辞

本研究にご協力いただきましたみなさま、学校職員のみなさまに深く感謝いたします。

本研究の一部は第9回北日本看護学会学術集会上で発表した。

#### 文 献

- 1) 健やか親子21検討会. 健やか親子21検討会報告書—母子保健の2010年までの国民運動計画—. [http://www1.mhlw.go.jp/topics/sukoyaka/tp1117-1\\_c\\_18.html](http://www1.mhlw.go.jp/topics/sukoyaka/tp1117-1_c_18.html).
- 2) 工藤美子, 山本あい子, 田村康子, 他. 事例にみる思春期の娘と更年期のその母親の健康. 日本母性看護学会誌 2002; 2(2): 49-54.
- 3) 下山晴彦. 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—. 教育心理学研究 1992; 40: 121-129.
- 4) 土肥伊都子. ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成. 教育心理学研究 1996; 44: 187-194.
- 5) 小山嵩夫, 麻生武志. 更年期婦人における漢方治療: 簡略化した更年期指数による評価. 産婦人科漢方研究のあゆみ 1992; 9: 30-34.
- 6) 小山嵩夫. 私の更年期指数. 産婦人科治療 1998; 77(1): 104-107.
- 7) 田部井明美. SPSS完全活用法 共分散構造分析(AMOS)によるアンケート処理. 第3版. 東京: 東京図書, 2003
- 8) 下山晴彦. 高校生の人格発達と進路決定—テストバッテリーを用いての縦断的事例研究—. 東京大学教育学部紀要 1982; 22: 211-222.
- 9) 下山晴彦. 高校生の人格発達状況と進路決定との関連性についての一研究. 教育心理学研究 1983; 31: 157-162.
- 10) 下山晴彦. ある高校の進路決定過程の縦断的研究. 教育心理学研究 1984; 32: 206-211.
- 11) 榎本淳子. 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化. 教育心理学研究 1999; 47: 180-190.